



国松 俊英 さん

町田市に住んでいる児童文学作家・くにまつとしひで国松俊英さんの本を紹介します。文学館や図書館で閲覧・貸出できます。ぜひ手に取ってみてください。

作家紹介

1940 年、滋賀県野洲郡守山町（現・滋賀県守山市）生まれ。

同志社大学卒業後、上京し児童文学同人誌「ピノキオ」に参加、砂田弘に師事した。1975 年に『ホタルの町通信』でデビュー。1978 年に発表した『おかしい金曜日』では、既に社会問題となっていたにも関わらず、児童文学ではタブーとされていた家出や離婚による子どもたちの問題を扱い大きな衝撃を与えた。この後、文筆業の道に入る。1986 年『はばたけオオタカ』で初めてノンフィクションを執筆。野鳥や自然、人物を題材にしたノンフィクションを多数発表している。2012 年に『トキよ 未来へはばたけ』で、第 7 回福田清人賞を受賞。2019 年児童文芸ノンフィクション文学賞特別賞受賞。

1989 年から町田に在住。



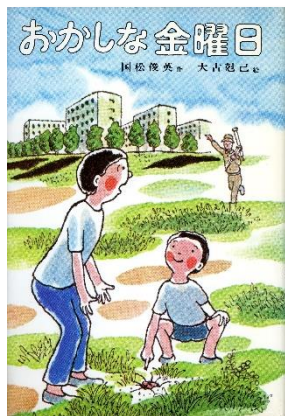
作品介绍

『おかしな金曜日』 絵・大古尅巳(1978年 偕成社)

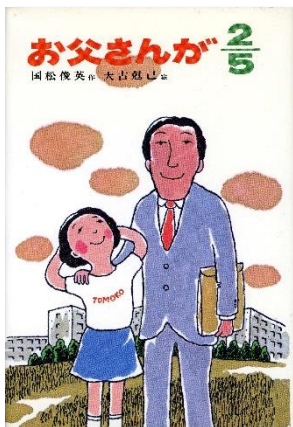
●あらすじ●小学5年生の伊達洋一は小学1年生の弟・健二と二人きりでくらしている。1年前、父ちゃんとはつぜんいなくなってしまった。そしてさいきん、母ちゃんもかえってこなくなった。

洋一になにかあったと気がついたクラスメイトのみさ子と山田の力をかりながら本当のことはかくして兄弟二人だけの生活をつづけていこうと思っていたが…。

本作は児童文学で社会問題を扱い発表当時衝撃を与えた。失踪や育児放棄、児童相談所という子どもが聞きなれない問題が織り込まれているが、決して遠い世界のお話ではない。すぐそばにある現実とそこで懸命に生きる兄弟の姿が明るさとユーモアをもって描かれている。



『お父さんが5分の2』 絵・大古尅巳 (1980年 偕成社)



●あらすじ●ある日、お父さんの会社の人から電話がかかってきた。会社を休んだお父さんに用事があったみたいだけど、お父さんは今朝、いつものとおり会社にでかけたはず。小学5年生の山崎知子はお父さんがどこへ行ったのか考えてみたが、家にいないときのお父さんのことを実はよく知らないことがわかっただけだった。知子はお父さんをよく観察するようになったが…。

表題作の「お父さんが5分の2」の他5話を収録。

『宿題ロボットてんさいくん』 絵・藤本四郎（1983 年 偕成社）

●あらすじ● 小学3年生の星野だいすけは宿題わすれの名人。外ではたらいしているお父さんとお母さんは、だいすけのためにひみつのロボットをつれてきた。だいすけは宿題をいっしょにやってあそびにもつきあってくれるロボットを「てんさいくん」と名づけ、てんさいくんといっしょにいるためにサッカーの練習も友だちのたのみもみんなことわった。でもある日、ひみつを知ったいじわるなクラスメイト・かずおに、てんさいくんを1日かしたらこわされてしまい…。



『いばるな、おねえちゃん』 絵・福田いわお（1986 年 岩崎書店）



●あらすじ●

小学1年生のたけしは、いらなくなったどうぐやきかいがだいすき。ある日、お母さんからいらなくなった乳母車をもらった。乳母車をかいぞうして“うちゅうせん”にしたけれど、3さい年上のおねえちゃんはふるいどうぐやきかいが気に入らないみたい…。

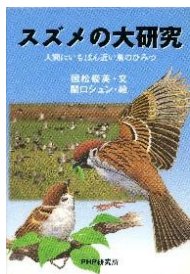
『なぞなぞだいきらい』 絵・村井香葉（1992 年 PHP 研究所）

●あらすじ● 2年1組で同じクラスの大原けんたはいやなやつ。先生のまえではいい子にしているのに、先生がいけないといじわるをする。けんたはこのごろなぞなぞがだいすき。道をとおりたかったら、なぞなぞにせいかいしなければならいなんて、みんなにいじわるをしてこまらせている。みすずはけんたのなぞなぞに答えられるようにお兄ちゃんとはつくんをはじめた。そんなある日みすずは、お父さんと二人だけでくらしているけんたの家のかぎをひろった…。



登場人物たちと一緒にたくさんのなぞなぞをとくながら楽しめる一冊。

〇〇大研究



街でよくみかける、なんだかこわい鳥。そう思われることが多いカラスだけでなく、とってもあたまがよく、人間と仲良くくらすカラスもいた。昔から人間のくらしの近くにいたカラスは、いろいろな伝説にも登場する。カラスはむかし三本足で、同じ三本足で空を飛ぶことができない犬に足を一本あげたというお話もある。読み終わると、カラスのイメージが大きく変わるかも。(『カラスの大研究』より)

絵・関口シュン (PHP研究所)

- 『カラスの大研究』(2000 年)
- 『スズメの大研究』(2004 年)
- 『ハトの大研究』(2005 年)
- 『ツルの大研究』(2006 年)
- 『フクロウの大研究』(2006 年)

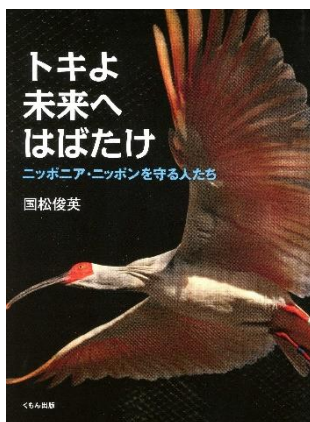
『メジャーリーグの大研究』
(2003 年)も！



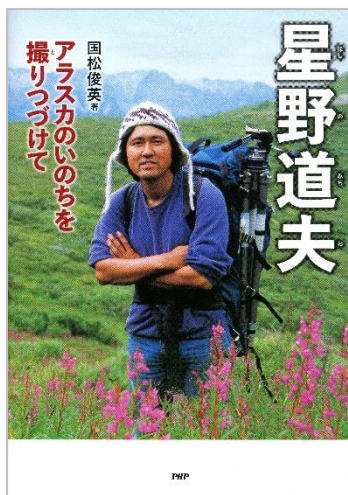
『トキよ未来へはばたけ—ニッポニア・ニッポンを守るひとたち』
(2011 年 くもん出版)

トキの学名は「ニッポニア・ニッポン」と名づけられている。学名とは、ラテン語による動植物の世界共通の名前で、「ニッポニア・ニッポン」は「日本にいるもっとも日本的な鳥」という意味。

かつてトキは日本中にすんでいた。どこにでもふつうにいたトキがどうしていなくなってしまったのか。トキの歴史と、絶滅から守ろうとした人たちをたどり、わたしたちと自然と生きものとの関係を考える。



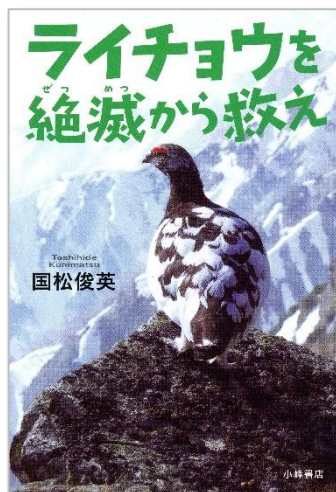
『星野道夫 アラスカのいのちを撮りつづけて』(2016年 PHP 研究所)



20歳の星野道夫は、たまたま古本屋でアラスカの写真集と出会い、エスキモーの小さな村の写真に強く引きつけられた。アラスカに行ってみたくなり、顔も住所もわからない村長に英語で手紙をだした。出したことを忘れた頃になってようやく返事が届き、アラスカの村に出かけた。有名な写真家、冒険家、詩人になっていく星野道夫の第一歩だった。家族や友人たちに著者が丁寧にインタビューをして、幼少期の出来事から星野道夫の人生を辿っていく。

『ライチョウを絶滅から救え』(2018年 小峰書店)

ライチョウは今から2～3万年も前、まだ地球が今よりもずっと寒かったころ日本に移りすんだ。今は日本アルプスの高山帯にだけ生息している。昔の人は神様のいる高い山にすむ鳥として大切にした。世界には19種類のライチョウの仲間がいるが、人間の姿をみてこわがって逃げて行ってしまわないのは、日本のライチョウだけだという。しかし、そんな日本のライチョウがいなくなろうとしている。地球温暖化の影響で住む場所が少なくなっているのだ。ライチョウを絶滅の危機から救うため研究を続ける鳥類学者・中村浩志先生のおはなし。



フォア文庫の伝記

絵・十々夜（岩崎書店）



『坂本龍馬』(2009 年)
 『勝海舟』(2010 年)
 『お江』(2010 年)
 『伊能忠敬』(2011 年)
 『平清盛』(2011 年)
 『新島八重』(2012 年)
 『黒田官兵衛』(2013 年)
 『真田幸村』(2015 年)

歴史に名前をのこす偉人たちをわかりやすい文章とイラストで知ることができるフォア文庫の伝記。坂本龍馬、新島八重、お江、平清盛、黒田官兵衛、真田幸村は大河ドラマで取り上げられ、放送に先駆けて刊行された。勝海舟は 1974 年の大河ドラマで取り上げられている。

『手塚治虫』 絵・藤本四郎(1998 年 ポプラ社)

「鉄腕アトム」など、数多くの作品をのこし「漫画の神様」と呼ばれる手塚治虫の物語。医者の道とマンガの道とどちらをとるべきか迷っていた治虫がマンガ家になる決心をしたのは母親の「どっちが好きなの？」という問いかけだった。

手塚治虫やキャラクターの情報がたくさんわかる「ものしりガイド」つき。2010 年には文庫版も刊行された。





『トキよ おおぞらへ』 絵・鈴木まもる

(2000 年 金の星社)

●あらすじ●かつてトキは日本のどこにでもいましたが、すっかり数がへってしまいました。そんなある日 1 羽の子どものトキが田んぼにまよいでました。とりがすきな「うじきんたろうさん」はこのトキを見守りつづけ、さいごはずっと守っていくために、なついていたトキをそっとだきしめてほごセンターに送りました。このトキが日本にもともといたさいごのトキ、キンでした。

1 羽だけになったキンと、日本のトキをすくうため中国から贈られたトキの夫婦。トキの未来をつなぐ実話をもとにしたお話。

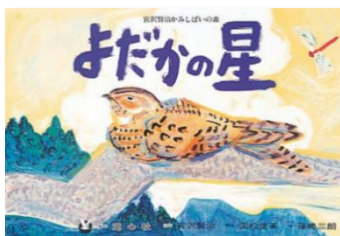
『はしれさんてつ、きぼうをのせて』 絵・間瀬なおかた

(2014 年 WAVE 出版)

●あらすじ●地元の人たちに「さんてつ」と呼ばれる列車は岩手県の太平洋岸を走っていました。2011 年 3 月 11 日、大きな地震が東北地方をおそい、さんてつが走っていた線路も、駅も、かわりはてた姿になってしまいます。

さんてつの社長の望月さんは、会社がこれからどうなっていくかわからない不安の中でもみんなであえへむかってすすんでいくために、たとえみじかい区間でもいいからなるべく早く列車を走らせることをきめました…。





『よだかの星』

絵・篠崎三朗、原作・宮沢賢治

(1996 年 童心社)

●あらすじ●みにくいヨダカはみんなから
きらわれていました。じぶんになに名前
のヨダカが気に入らないタカは、名前を“いち

ぞう”にかえなければころしてしまうとおどします。夜になり、羽虫をたくさんたべたヨダカは、自分がたくさんの羽虫をころすこと、その自分がタカにころされることがとてもつらくなり、どこかとおいとおいところへいくことにしました…。

『おいの森とざる森、ぬすと森』

絵・福田庄助、原作・宮沢賢治

(1996 年 童心社)

●あらすじ●岩手山のふもとには、おいの
森、ざる森、くろさか森、ぬすと森の四つの森

があります。四つの森にはどうしてこんなかわった名前がついたのでしょうか。くろさか森のまんなかにある大きな岩がずっとむかしの人間と森のおはなしをしてくれました。



『なぜ、せつぶんに豆をまくの?』

絵・藤田勝治 監修・常光徹

(2001 年 童心社)

●あらすじ●むかし山のふもとの村におふく
というむすめと、かあさんがすんでいました。

ある年、春から雨がふらず日でりの日がつづいて田んぼの水もかれてしまいました。かあさんがいのるように「だれか雨をふらせておくれ。なんでもほしいものをあげるから」というと、そこへおにがやってきて…。



「わざわざことわざ ことわざ事典」 絵・たかいよしかず

(2009 年 童心社 全 4 巻)

(1)いきものの巻 (2)からだとなべものの巻 (3)せいかつの巻 (4)かずの巻



表紙にも登場している「なんじゃもんじゃ」と「なんだかんだ」といっしょに楽しくことわざを学ぶことができることわざ事典。イラストは「怪談レストラン」を手がけるたかいよしかずさん。

「日本の野鳥図鑑」 写真・中野泰敬ほか

(1995 年 偕成社 全 2 巻)

日常でよく見る鳥からめずらしい鳥まで
1と2合わせて170種の鳥の姿・特徴・和名の由来・学名を紹介。



『鳥のくちばし図鑑 たべる・はこぶ・つくる』 絵・水谷高英

(2007 年 岩崎書店)



鳥のくちばしはそれぞれ、えさの種類やとり方によってかわります。鳥たちがどことなくちばしをもち、どのようにつかっているのかをくわしいイラストとともに紹介。

「どうぶつ感動ものがたり」(2008 年 ポプラ社 全 10 巻)

1. 『盲導犬リチャードからのおくりもの』
2. 『げんきです、車いすの犬 花子』
3. 『子牛のモグタンは新入生』
4. 『がんばれ義足の麒麟 たいよう』
5. 『イルカのジャンプに夢をのせて』
6. 『ゴリラをたずねてアフリカへ』
7. 『トキとつきあった127日』
8. 『コアラのラッキー たいせつな命』
9. 『ゾウガメからのメッセージ』
10. 『カバはぼくのともだちだ』



動物と人間のふれあいをテーマにしたノンフィクション短編集。

「名前のはじまり探検隊」 絵・熊谷さとし

(1999 年-2002 年 岩崎書店 全 10 巻)

1. 『人名のひみつ』
2. 『地名のひみつ』
3. 『生きものの名前のなぞ』
4. 『スポーツの名前のなぞ』
5. 『道具の名前のなぞ』
6. 『のりものの名前のひみつ』
7. 『たべものの名前のひみつ』
8. 『行事の名まえのひみつ』
9. 『人名のひみつ パート2』
10. 『地名のひみつ パート2』



『宮沢賢治 鳥の世界』画・薮内正幸
(1996 年 小学館)



宮沢賢治の「よだかの星」には、「よだか」を消し「ぶとしぎ」と書き改めた草稿が遺されている。「ぶとしぎ」は、「ぶとしぎ」や「ぼとしぎ」としても賢治の詩に登場する。その正体は詩の描写や古い図鑑などからオオジシギの地方名であると考えられた。オオジシギには「ピチャクカムイ」として天に住んでいたが神様からのお使いを忘れて地上で遊び惚けていたために天から追放されたとするアイヌの伝承が遺されていて、賢治も大正12年、13年に北海道を訪れ、その後、当時関心が高まり多く出版

されたアイヌの本や記事も読んでいたと思われる。「よだかの星」を書き改め、「ぶとしぎ」の物語を紡ごうとしていたのだろうか。『注文の多い料理店』を大正13年12月に刊行した後、賢治が作ろうとしていた童話集のひとつ「花鳥童話集」の構想メモには「まなづるとダアリヤ」「黄色いトマト」などとともに「ぼとしぎ」と書かれている。(「第2章 ヨタカは天に還る」より)

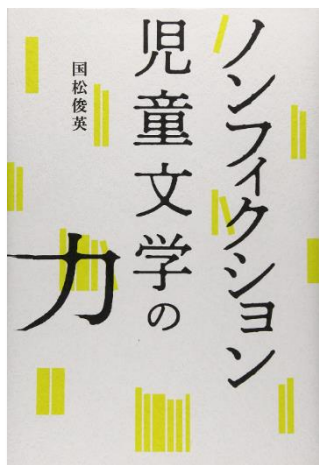
宮沢賢治の童話、短編、劇、127編の中に登場する鳥類は55種類を数える。賢治はどんな鳥をみて、何を想い、作品を紡いでいったのか。著者が探偵のように真相を追い求めていく。

『ノンフィクション児童文学の力』（2017 年 文溪堂）

「ノンフィクション児童文学は、ほんとうのことを知りたいと思い、多くの知識を求めようとする子どもたちに、社会や人間の本質を伝える力を持つ文学である。（略）

ノンフィクション児童文学は、私たちのまわりで起きた事件やことがら、一人の人間の生き方と仕事を題材にして作品化する。題材として取り上げた事実の持っている感動、驚き、不思議さ、おもしろさなどを生かして、読者を満足させる文学作品を創り上げるのである。すぐれたノンフィクション

作品は、劇的な展開と迫真性を持ち、創造性、文学性の高い世界を読者の前に展開することができる。」（「はじめに」より引用）



児童文学のなかで「食わず嫌い」をされがちだが、ノンフィクションは“事実”の力強さをもっている。長年ノンフィクション児童文学を手がけてきた著者がその歴史や魅力を掘り下げて紹介。

「読んでおきたいノンフィクション児童文学」のほか、著者自身の豊富な経験から語られる取材の秘訣やネタのを見つけ方などノンフィクション児童文学の魅力がぎゅっとつまった一冊。

読んでみたい本があったときや、
ここにのっていない国松さんの本について知りたいときには、
文学館や図書館のカウンターにお声がけください。

発行 町田市民文学館ことばらんど 2021 年 5 月